



学校だより

平成 30 年 5 月 29 日
横浜市立高田小学校

6月号

伸びよう 豊かに たくましく ～学ぶ喜びにあふれた学校をめざして～

「フェアプレー」

副校長 山谷 浩司

「蒸し暑い!!」と感じられる日が多くなってきました。入梅が間近に迫り、梅雨明けまでの一ヶ月は、一年で最も鬱陶しい時期に差し掛かります。体調管理に留意し、毎日を健康に過ごしていきたいものです。

さて、FIFA ワールドカップ・ロシア大会の開幕が近づいてきました。日本代表は強豪国を相手にどんな戦いを見せるのか、注目の国、注目の選手と、サッカーフリークにとって興味は尽きません。私がワールドカップを初めてテレビ観戦したのは高校生の頃で、1982年のスペイン大会が最初でした。当時の日本は、ワールドカップ本大会に出場した経験が全くなかったため、最大のイベントであるワールドカップでさえ、その注目度はかなり低く、テレビ中継される試合も限られていました。

この大会で注目を集めた国はブラジルでした。ジーコ、ファルカン、トニーニョ・セレーゾ、ソクラテスといったタレントを中盤に揃え、面白いようにパスをつないで攻撃的に戦うポゼッションサッカーはとても魅力的でお洒落に映りました。ブラジルは初戦から最高のパフォーマンスを発揮し、3戦3勝で(2-1 リ連、4-1 スコットランド、4-0 ニュージーランド)で難なく1次リーグを勝ち上がりました。2次リーグでは初戦でアルゼンチンを3-1で下したものの、2戦目のイタリア戦はブラジルがイタリアを追いかける展開となりました。激戦の渦中にいた10番・ジーコには、イタリア戦に纏わる次のような『秘話』がありました。

イタリアは堅い守備で知られる強豪で、サッカー王国・ブラジルにとっても簡単な相手ではありません。しかし、1次リーグを3戦3分けと薄氷を踏む思いで勝ち進んだイタリアの苦戦は避けられないというのが、大方の予想でした。ところがイタリアにはマンマークを武器に「エースキラー」の異名をもつクラウディオ・ジェンティーレがブラジルの攻撃の起点となるジーコを徹底マークし、ファウルすれすれの激しいタックルで何度も倒し、攻撃の芽を摘んでいきました。試合は1点を争う好ゲームとなりましたが、2-3でブラジルは敗退しました。ジーコのユニフォームは、激戦を物語るようにビリビリの状態でした。

試合後、気落ちしていたはずのジーコは、イタリア選手団が乗車しているバスに乗り込みました。そして、ジーコをマークし続けたクラウディオ・ジェンティーレの前に立ち、猛烈な抗議をしようと思ったその瞬間、手を差し出し、握手を求めました。そして、

「君たちのプレーは素晴らしかった。私たちはイタリアの優勝を祈っている。」と、エールを送りました。

勝ち進んだイタリアは、準決勝でポーランドを2-0で破って勢いに乗り、決勝は西ドイツを3-1で下し、見事優勝しました。一方、ブラジルはこの大会で『フェアプレー賞』を受賞しました。

晩年、ジーコは鹿島アントラーズに入団し、Jリーグでもサッカーの楽しさや面白さをプレーで表現しました。引退後、2006年FIFAワールドカップ・ドイツ大会では、日本代表の監督としてチームを率いました。ジーコから学んだフェアプレー精神は、現在の日本代表にも脈々と受け継がれていることでしょう。

学校生活でも勝ち負けを決する機会はたくさんあります。休憩時間の遊びに始まり、運動会や体育の時間の競技に至るまで、様々なものに「勝った」、「負けた」がついて回ります。勝者は歓喜の雄叫びをあげ、敗者はガックリうな垂れます。それで収束すればよいのですが、悔しい気持ちを抑えられない場合、相手に向かって「口撃」が始まり、やがて喧嘩に発展するケースもしばしば見られます。

私は勝利以上に尊いものがあると確信しています。勝利を目指して努力する姿。最後まで全力を尽くす姿。結果を受け入れ、お互いの健闘を讃える姿。足らざるを知り、新たな目標に向かって再び努力する姿……。それら一つ一つの姿が途轍もなく尊いものであることを、これまで経験した様々なスポーツを通して学んできました。これから始まるワールドカップ・ロシア大会でも、たくさんのフェアプレーが子どもたちの心を捉え、フェアプレーのもつ意義や大切さ、尊さについて感じ取ってくれることを期待しています。